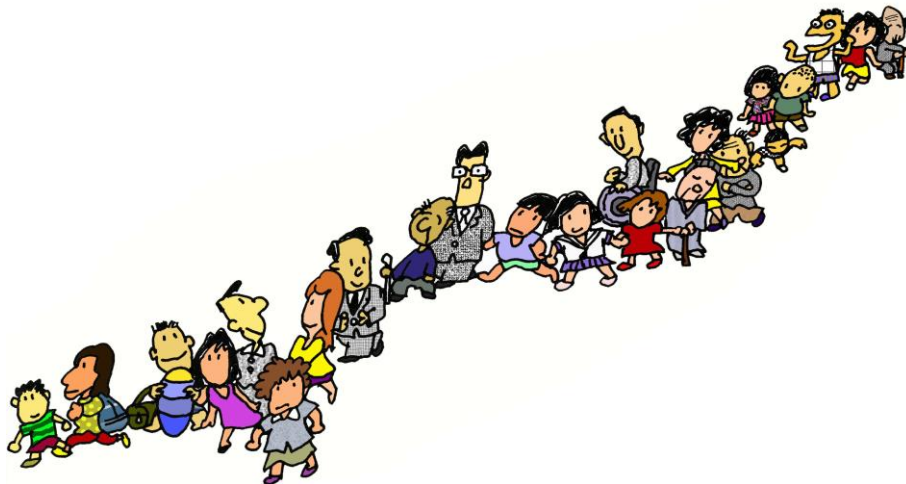


Family

History

(4)

団士郎／団いどむ



上の世代が亡くなり、新しい世代の誕生を迎える。この順繰りで世界は継続されてきた。我が家もその一部なので当然、そんな事態が発生する。

2020年8月、妻が亡くなった。七十歳だった。結婚して四十七年目のことだった。そして2021年3月、娘が女兒を出産した。この一年の間に我がファミリーから女性が一人減り、一人増えた。ファミリー・ヒストリーはそんな事実につつまれる枝葉を、探し歩いているような作業だ。

妻の相続手続きのため、出生から亡くなるまでの戸籍謄本を準備しなければならなかった。本籍をずっと大昔のままにしてある人は、そこに郵送請求するか、取りに行けば良い。しかし私は誰も住まなくなった場所に本籍を留めておくことに違和感があった。そこで、転居の度に本籍を現住地に移してきた。パスポートの手続きなどには合理的だと思ってきた。

ところが今回、そのせいで、京都市(二カ所)、宇治市、福知山市を一日かけて戸籍謄本集めに巡る事になった。ついでに昔暮らしていた場所を同行の長男(遊)と久々に覗くことになった。子ども達が母親に慈しまれて育った場所を巡ったのだ。しかし当時、自分のことばかりで多忙にしていたので、それほどの感慨もなく、息子にあきれられた。そういうオヤジである。

母方祖父 信之

個人の記録ではあるが、社会的な立場、役職にあった人は公式記録が残っている。私の母の出身家族、藤竹家は藤竹信之(私にとって母方祖父)が日本陸軍の職業軍人であったために、そこに記録が残されることになった。

私にこの祖父の記憶はほとんどない。葬儀に出席したのが1番の記憶だが、京都市左京区下鴨のマクリン幼稚園の教会で行われた場で、牧師の言葉を受けて、大声で「ばんぐんのー、言うたぞー」と繰り返したと父(五士郎)から笑い話にされたことだけ覚えている。よく意味が分からないが、父は何度も話題にした。その連想で、私は当時学齢前であったのだろうかと思いついていたが、いどむ調査員作成の年表を見ると、10歳、小学4年生であったらしい。なぜ、こんなにも記憶にないのだろうかと思ふ不思議な気がする。

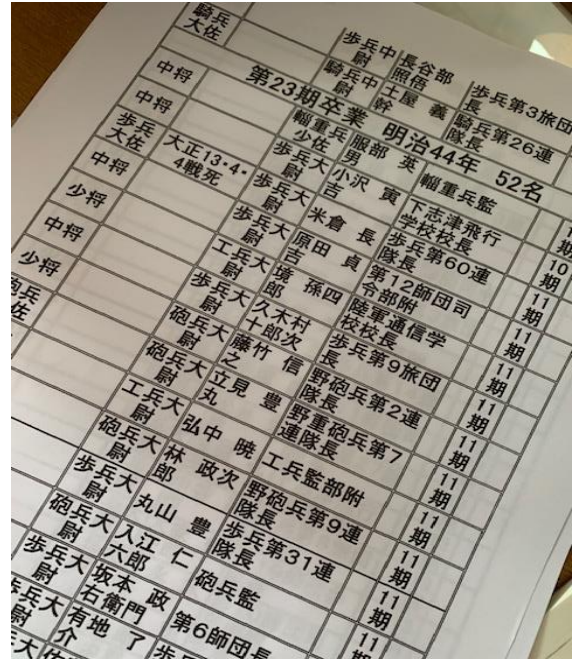
教会での葬儀だったことも、ずっと後になって不思議な気がした。クリスチャン一家だったわけではなく、信之は歳をとってから自分1人洗礼を受けてクリスチャンになったと聞いた。理由は知らない。誰かが話しているのを聞いた記憶も無い。私の母が生きてるうちなら、その事情を知っていたかもしれないが、話題になった事はなかったと思う。

この話をいどむ調査員から当時の状況話と合わせて聞いていて思い出したことがある。日本社会において、歳をとってからクリスチャンになる人が増えた時期があった。なぜだったか、どんな状況の反映だったのか記憶にないが、そういう一人だったかもしれない。

近年、関心を持ち始めて取り寄せた兵籍簿。藤竹信之(母方祖父)のそれが強く気になりだした。出身は熊本の人である。

熊本の名門、旧制中学済々黌から陸軍士官学校を経て、陸軍大学校に入学している。陸軍大学校の在籍者名簿や、その後の事は日本陸軍の配属地ルートから調べると色々な事がわかるらしく、いどむが広範な資料を集めてきて、あれこれ話してくれた。

熊本・中学済々黌からは多くの陸軍士官学校入学者、陸軍大学校入学者を出している。そういうルートの名門校だったようだ。その中には陸軍大将、中将、少将等に名を連ねる人も多い。



藤竹信之は大正15年(昭和元年)、四十九歳で少将・待命、予備役(所属は第六師団・熊本)となって京都に暮らし、銀行員になった。そこで六人の子どもを育てた。

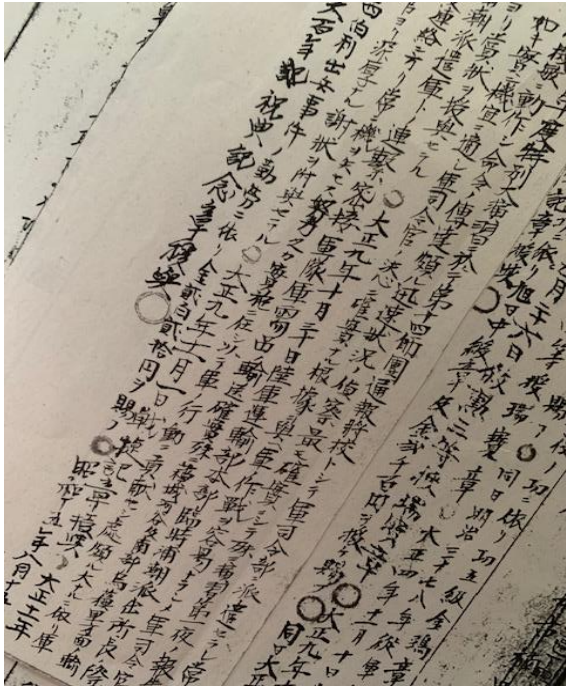
大正から昭和への時代の変わり目とも言える年に予備役(現役を退いた軍人が一定期間服する兵役のこと。普段は民間で生活を送るものの、必要があれば軍に呼び戻され、一定期間指定された職務につく役種をいう)になったことになる。

1920年前後(大正時代)の日本といえば、第一次世界大戦には連合軍側の一員として参戦し、ロシア革命を経て樹立したソヴィエト連邦に対し、連合軍と共に干渉戦争を仕掛けている。そこには同時に、大陸進出への野心も見え隠れしており、そのことが後の日中戦争、第二次世界大戦へと繋がることも指摘されている。

兵籍簿によると信之はこの時期、運輸部に所属し、1919年9月、大陸への玄関口、臨時浦潮(=ウラジオストック)派出所長として赴任している。

その後、1921年には久留米配属となり、翌年に私の母・久子がこの地で誕生している。(久留米生まれの子で久子と名付けられた)。

また、シベリア出兵に伴う必要物資の輸送について、現地で連携を図り多大な貢献をおこなったとの事で、「1922年11月、西伯利(シベリア)出兵事件の勤労により、金貳百貳拾円を賜う」と兵籍簿には記録されている。



そして、1923年には野砲兵第二連隊長として仙台(第二師団)に赴任。全国を股にかけた家族での大移動。職業軍人とはこういうものなのだろう。

1925年(大正14)10月、仙台では陸軍特別大演習が行われ、その最終日には観兵式が行われた。

天皇臨席のこの式典には、遠く満州からは張作霖の右腕だった郭松齢がはるばるやって来ている。しかし予定より早く満州に呼び戻された郭は、方向性の違いにより張作霖と対立することとなり、直後の12月末に銃殺されることになる。

そして張作霖も、それから3年後の1928年(昭和3)には、関東軍によって爆殺されてしまう。

第一次世界大戦後の不況や束の間の平和到来、また大正デモクラシーなどの時代背景を受け、世界的な軍縮への動きが強まるなか、日本でも「軍の予

算削減・人員削減」が政治の主要テーマとして浮上し、次第に軍人は肩身の狭い存在へとその地位を変えていく。

その突破口を開こうとしたのか、国内外ともに軍の行動は強引さを感じさせる事案が散見されるようになっていくのが1920年代前後の特徴であった。

こうした時代背景のなか、信之は観兵式の翌年、1926年(大正15)3月末には予備役となっており、また同じ時期に仙台副連隊長も退役の記録が残っている。時代背景や軍縮の流れを勘案した上で、自らの軍人人生に区切りをつけたのであろうか。

信之はその後、少将の定年年齢である58歳(1935年)までは予備役として編入されていたものの、第二次世界大戦(1939-45)時には既に予備役も退役し、京都で勤め人として生活する一民間人であった。そのため終戦時には戦犯として追及される事はなかったであろう、というのが私たちの推測である。

しかし年代的に、陸軍大学校23期と言え、終戦時の参謀総長として戦艦ミズーリでの降伏文書調印式に出席した梅津美治郎や、陸軍統制派の頭領と目されていた永田鉄山と同期であるため(ただし年齢的には信之の方が5歳ほど年上)、もし早めの予備役編入となっていなければ、歴史の渦に巻き込まれていた可能性も十分にあると想像される。

そこであらためて引っかかってくるのが、藤竹家の跡継ぎである信之が、職業軍人歴を経て、なぜ高齢になってからクリスチャンになったのかということである。

そこは存命の孫であるMさん(私のいとこ)にお目にかかって話を聞きたいと思っているところだが、コロナ禍もあり、まだ実現できていない。

また、祖父信之の息子たち、信英、信雄(私の母の兄と弟)の兵籍簿はどうなっているのだろう。私にとっての伯父、叔父も共に職業軍人だった時期があったような記憶あるが確かではない。

信英伯父は跡取り長男として、下鴨の古い家を継いだ。そこで内科・小児科を開業し、後に下鴨本通りに転居して開業医として暮らし、息子(英樹・私のいと

こ)を跡取りの医師に育て、医院を継がせた。

母の弟、信雄叔父は原爆投下時の広島に軍務でいて、生き延びた人だった。結婚はしたが子はもうけず、京都の醍醐・石田団地で妻と二人、静かに暮らした。簡易保険局に勤務しながら、京都労演の事務局を手伝っていたので、舞台公演会場でしばしばお目にかかることがあった。

読書家でもあり、そんな話題で手紙の交流があり、親戚の叔父さんと言うより、大人になってからの同好の士といった感じだった。

亡くなったとき、団地の小集会場で行なった葬儀が印象に残っている。それまで私が経験していたのは、いわゆる葬儀社の会場で、多くの会葬者に対応し、挨拶する喪主のいるものだった。

しかし信雄叔父のそれは、叔父の兄弟姉妹(私の母)と数人の甥、姪だけの小さな儀式だった。そして、僧侶の経が終わったら、出席者皆で、故人の記憶を披露し合った。信英伯父は弟である故人との子ども時代の思い出を語った。この葬儀のイメージは、私の中にずっと生き続けた。

團家

「團の家は商売人やん。だったら公の記録に團家のことなんかあまり出てこないよね。同じルーツ探してもずいぶん調べ方が違うことになるやろ？」

「團の家は士族の出やから・・・」という父方祖母・田鶴の口癖のとおり若狭小浜藩士であった規作は、43歳の時、明治維新を迎えた。侍の時代が続けば、跡取りとなっていたはずの長男・雄太郎はその時14歳。明治4年の廃藩置県で、小浜藩は小浜県となった。

侍の時代は終わった。このまま小浜にいても跡を継がせられるものではないと規作は考え、息子には自分で道を開けと家から離れたのではないだろうか。

その後の息子の足跡に関する詳細は明らかではない。しかしながら、父・規作が1860年代には滋賀県高島郡で代官を務め、藩の交易に携わっていたこと、および、1880年代には長男・雄太郎が天津で運

送業を営んでいる事から推測すると、何らかのツテを辿って、高島か天津へと出て行ったのではないかと考えられる。

そして1884年、天津で運送業を開始したとの記録がある。いきなり始められるものではないだろうから、その間、丁稚などで修行を積み、目途をつけた上で商売を興したのではないだろうか。その翌年には、商売が軌道に乗り始めたのか、引き続き小浜で県関係の仕事についていた父・規作を、天津に呼び寄せた記録が残っている。武家社会がなくなった後の文字通りの「武家の商法」である。

「そんなことがうかがい知れる書き付けはどこにあったの？」

「丸まって入っていた由緒書。過去帳とは別にあった。」

「天津に来てからの商売のことは？何で調べるの？」

「それはなかなか難しかった。詳しくは分かっていないんだけど、商売で世話になっていたらしい西利商店との繋がりから調べてみることにした。」

天津で西利商店を興した初代・西田利七さんの孫である西田善一さんは、戦後に大津市長を2期8年つとめた人物であるため、紳士録などには西田家初代からの記録が残されている。それらと我が家の由緒書とを照らし合わせ考えていくと、どの年代の誰が、團の家とどう絡んで来たのかが浮かび上がってくる。この時代の記録を調べたいのであれば、家に伝わる家系図や過去帳などが見当たなくても、役所の公式記録である戸籍謄本を、本籍地をさかのぼって請求していけば、ある程度は記録が残っている。

近代戸籍のもとになっているのは、明治5年に制定された戸籍制度になる。それから現代に至るまで、何度かの法律改正に伴って様式が変更されながらも、現代まで脈々と続いている。現在の戸籍制度では150年間の保管義務があるものの、2010年(平成22)までは保存期間が80年だった。そのため1930年

(昭和5)以前のものは、自治体によっては既に廃棄されているケースもあるようだ。その保存状況は、そもそものデータの総量やデジタル化に伴う移行作業等によって、自治体によってまちまちである。各自治体に請求をした経験からいうと、概ね1900年前後くらいまでの記録は残されていることが多い。しかしながらこれらもそのうち、どんどん廃棄されていくのだろう。

興味がある方は一度、自身の先祖を辿ってみられるのも面白いのではないだろうか(基本的には郵送でも受付が可能。血縁者のみが請求可能である)。

一方、地元の図書館に行ってみると、どうでも良いようなものも含め、今は埋め立てられてしまった琵琶湖・浜大津湖岸の埋め立て前の昔の地図など、色々と資料が残っている。

そこで大津市立図書館と滋賀県立図書館に行つて、運送業(屋号は團運送とか?)などの名簿や名鑑などが残っていないか探してみたものの、なかなかお目当てのものには巡り合わない。

そんな中、県立図書館の郷土史コーナーを隅から隅まで眺めていると、「滋賀県資産家一覧表」という明治後期に発刊された古い古い本に遭遇した。いわゆる当時の高額納税者名簿だ。パラパラと中をめぐってみると、そのリストの中でなんと「團雄太郎」の名前を発見した。ここに居た。たしかに痕跡が残されていた。興奮した。

こういう本には、ネット検索ではなかなかたどり着けない。本の内容などの情報が全てネットに投げ込まれている訳ではないことを改めて実感する。ネットは便利だが、そこに載せきれていない情報もたくさん存在するのだ。

これは1910年(明治 43)の古い本であり、国会図書館のデータベース検索ではたどり着けなかったものだが、それが地元の県立図書館にはちゃんと並んでいる。

*

そういう本があると分かっていたら探せるのだろう。

しかし、知らないものがどこにあるかを探るのは難しい。

起きたことは調査したり研究されたりもしているが、起こらないで済んだことは、なかなか調べられない。皆の願っていた事についての記録はないが、あって欲しくはなかったことの記録は膨大に残されているのが社会である。

同様のことを家族面接していると感じる。被害の調査結果や記憶はあるが、上手くやっている人や、やり方の記録は少ない。事実としては沢山あったはずだが残されることは少ない。

大事件ばかりが列記された歴史を、後年、我々は目にするようになる。しかし実際は、事件と事件の間に、些細なことの連続する生活時間があつたはずである。記録されないそれは、歴史にとってなかったことなのか、なくても良いものなのか。

記録する行為がそういうものなのだろう。更に、何を記録するかを決めるのは後の権力者である。大小を問わず勝利者の記録なのである。

市民社会にも歴史には残されない歴史がある。それをどう探すのかは、無茶苦茶難しい。しかしそれも合わせて歴史である。

記録を残す動機が弱い社会や、不都合なものは燃やしてしまう社会では記録は残らない。日本の近代歴史資料が日本国内になく、アメリカ公文書館にあるという事実は、それを物語っている。

*

ファミリー・ヒストリーの連載を、次男の力を借りて書きながら理解を深めていくと、日本の近代史がとても生き生きと、身近なものとして感じ取れる。

その時、その人はどう思ってその道を歩み始めたのだろうか? 未来の予測が立ってから行動に移していることは、今の時代よりずっと少ないだろう。

多くの情報に充たされて、可能性の吟味も済ませた上で、なお一步を踏み出せずに不安を口にする現代人。だから、未来が開拓される可能性まで縮んでしまったのだと言えるかもしれない。